

日本詩歌文学の始原と影響

齊藤昭子*

目次

- はじめに
- 1 日本語が表記を獲得する過程と歌の始原
- 2 日本古代の歌謡 内容
- 3 日本古代の歌謡の形式と漢詩の影響
- 4 歌集の成立
- 5 『万葉集』の中の東アジア
- 終わりに

はじめに

日本の詩歌は、古く定型詩として57577の音韻数を持つ短歌が確立されて、現在でも定型を持たない自由詩とともに詠まれつづけている。筆者も短歌結社に属し、毎月歌を提出している現代歌人の一人である。575の俳句は17世紀以降に独立して作られるようになり、こちらも現在でも多くの人に作られている。

日本の詩歌、その始発をいつと考えたらよいただろうか。『漢書』（前漢書）地理志に、「樂浪海中有倭人 分爲百餘國 以歲時來獻見云」という記事が見え、日本列島に小国ができていたこと、それらの小国が紀元前後には大陸との接触を持っていたことが知られる。また『魏志』倭人伝（『三国志』「魏書」第30卷烏丸鮮卑東夷倭人条）には、「其死有棺無槨 封土冢 始

* 桜美林大学校, cahier2@gmail.com

32 국제언어문학 제41호(2018.12)

死停喪十餘日 當時不食肉 喪主哭泣 他人就歌舞飲酒 已葬 學家詣水中澡浴 以如練沐」とある。死者を送る儀礼の中で、歌舞を用いない人々があるかどうかがむしろ不明というべきかもしれないが、遅くとも3世紀の日本列島に住む人々が、死者儀礼の中で「歌」（本稿では詩の前身として捉えておく）を用いていたことが知られる。

上にあげたような記録として残らなくとも、先進的な大陸の文化との接触の中で、素晴らしい歌舞音楽・詩歌のありように触れ、日本列島に住む人が瞠目しその学びに努めただろうことは容易に想像される。このような交流は、記録に残るはるか以前からあったのではないだろうか。日本古代の歌謡は、東アジアの他の国々の先進的な文化に刺激され発達した面が大きいと考えられる。他の国々との接触の中で、ふり返って自らの文化を問う姿勢が生まれてくる。藤井貞和は、「日本の古代歌謡の記憶ひいては発達は、時間をかけて、そのような先進国の文化によってかき立てられた〈民族〉意識や歴史意識の所産であろうとみるべきで、純粹に自律的な発達とは考えにくい」としており、首肯される。対他的なまなざしから内部への意識が生まれる。その意識によって、その場限りに歌われるのみでなく、詩歌も伝承されるべきものとして扱われるようになったはずである。

本稿では、日本語の詩歌の始発として古代の歌謡の内容を、現在残された最古の資料からその概略を考察し、紹介する。日本語が表記を獲得する過程からふり返り、素朴な形から5音・7音の定型を得る過程や、その表現の内容にいたるまで漢詩からどのように影響を受けているかを考え、現在に続く歌の歴史の始発を東アジアの関係性の中に捉えていきたい。

1 日本語が表記を獲得する過程と歌の始原

固有の文字を持たなかった日本語が、表記を獲得する過程の概略をまとめ

1) 「古代文学史論」（『岩波講座 日本文学史1』岩波書店1995年12月）

ると次のようになる。

- ①朝鮮半島(百済)経由 あるいは直接の往来で中国語を学ぶ
- ②「漢文体」で書く
- ③「変則漢文体」で書く—「訓読」を前提に日本語そのものを写すスタイル(「変体漢文」とも)。
- ④万葉仮名の登場(漢字を表音文字として使用、音訓が利用される形)
- ⑤ひらがな、カタカナの登場

そしてしばらく、和文体と漢文体が用途ごとに別々に使用される時代があり、中世の和漢混濁文(『平家物語』に代表される)ができ、現在の日本語表記へとつながっていく。

漢字が伝来し、日本語で「書く」ことの困難を伴うさまざまな試行の末、日本最古の書物として『古事記』(712年、口誦の神話を国家の歴史に結びつけて編集したもの)が成立した。その直後に『日本書紀』(720年、神話時代から始まる編年体の歴史書)が成立している。『古事記』は、上記の過程で言うと②と③、重要な語句や歌謡は④で表記されている。『日本書紀』は②、歌謡は④で表記されている。これら日本最古の書物の中に、歌が残されている。「記紀歌謡」と称する。『古事記』に110首、『日本書紀』に130首(重複を除くと「記紀歌謡」は190首)を数える。

現在私たちに遺されている、日本語の歌の始原を考える資料はまず、これらの書物の中にある歌謡ということになる。文字以前に、口誦されたものとして共同体のなかで伝承されてきたであろう歌の姿は、そのままの形でなく古事記・日本書紀の神話の中で登場人物によって歌われたもの等として残る。私たちは、物語の場面に組み込まれた歌を紐解き、古代の歌謡の一端を推測することができる。

2 日本古代の歌謡 内容

34 국제언어문학 제41호(2018.12)

本稿では、日本古代の歌謡の内容を大きく三つに分けて考えたい。①自然への語りかけ②「国の起源」の説明に用いられる歌謡③歌垣(男女の掛け合い)の三つである。

①自然への語りかけの歌

以下は『古事記』中巻 神武天皇の記事にある歌である。

(原文) 阿米都都 知籽理麻斯登登 那籽佐禰流斗米

(訓読) あめつつ 千鳥ままと などさける利目

(口語訳) アマ鳥・ツツ鳥・チドリ・シト鳥のように、どうして目じりに入墨をして、鋭い目をしているのですか。

ここでは、神武天皇の命令で大久米の命が姫に求婚の意を伝える文脈におかれている。そのため、③歌垣と関わる歌としても見ることが可能であり、現在付されている口語訳は、古事記の文脈に沿って内容が補われている。

「人に尋ねる」という物語の文脈を除くと、鳥たちへ語りかけた素朴な歌の段階を見ることができるのではないだろうか。

また、『古事記』中巻 倭建命の記事にある歌2首、

(原文) 宇美賀由氣婆 許斯那豆牟 意富迦波良能 宇恵具佐 宇美賀波伊 佐用布

(訓読) 海がゆけば 腰なつむ 大河原(おほかばら)の 植草(うゑぐさ) 海 欠(うみか)は いさよふ

(口語訳) 海を行けば腰がよれよれになるよ、私たちは大河の浮き草のように海に漂うから

(原文) 波麻都知登理 波麻用波由迦受 伊蘇豆多布

(訓読) 浜つ千鳥 浜よはゆかず 磯伝ふ

(口語訳) 浜の千鳥は、浜は行かないで磯を伝って行くので私たちは行くことができない

これらは、『古事記』では倭建命の死にあたって、葬送のための歌として置かれているが、もともと歌謡としてあったものが収集されて神話・物語の中に配されたと考えられる。そして、もとの歌謡としては自然を歌った、自然への語りかけ、人々の自然への驚きの念を見て取ることは許されるだろう。

このような自然への語りかけ、自然への驚きを歌にするというのは、日本語の歌謡のうち、最も素朴なレベルの歌と考えられる。このような歌は、日本奄美地方のユングトウに現在も残っており、古代歌謡を考える切り口の一つと考えられている。

これらの素朴な歌は、さまざまな場面で、人々に歌われていたことであろう。そのごく一部が、集団的行為としての祭式に結び付き、繰り返し歌われるようになる（その一部が伝承され、書記されて残った）。人々の自然への祈りや豊穡への願いが祭式へ、その中の歌謡は日常言語とは異なった水準が求められたことであろう。祭式で歌われる、ということは、その歌謡が人々と自然を共鳴させる力（豊穡や安全がもたらされる力）が信じられていたということである。これが日本古代の詩の始発の一つと考えられる。

②「国の起源」の説明に用いられる歌謡（宮廷行事の歌謡へ）

『古事記』中巻 神武天皇の記事に「来目(久米)歌」というものが残されている。

(原文) 宇陀能 多加紀爾 志藝和那波留 和賀麻都夜 志藝波佐夜良受
伊須久波斯 久治良佐夜流 古那美賀 那許波佐婆 多知曾婆能 微能那那久
袁 許紀志斐惠泥 宇波那理賀 那許婆佐婆 伊知佐加紀 微能意富那久袁 許
紀陀斐惠泥 豊豊 [音引] 志夜胡志夜 此者伊能基布曾 [此五字以音]。阿阿
[音引] 志夜胡志夜 此者嘲喚者也

(訓読) 宇陀の 高城(たかき)に 鳴(しぎ)罌(わな)は張る 我が待つや 鳴は
障(さや)らず いすくはし 鯨(くじら)障る

36 국제언어문학 제41호(2018.12)

前妻(こなみ)が 肴(な)こ乞はさば 立ち楓棧(そば)の 実の無けくを 扱
(こ)きしひゑね

後妻(うはなり)が 肴乞はさば 枡(いちさかき) 実の多けくを 許多(こき
だ)ひゑね

ええ しやこしや こはいのごふそ

ああ しやこしや こはあざわら(嘲笑)ふそ

(口語訳) 宇陀の山の上の平地に鳴を捉える罌を張る 私が待っていると
鳴はかからず鯨がかかった 前妻が菜(おかず)を求めてきたら 実のないと
ころを与えてやれ 後妻が菜を求めてきたら 実の多くなったのを たくさん
与えてやれ

エエー シヤコシヤ (罵りの言葉) 攻撃をするぞ

アアー シヤコシヤ (同) 嘲笑ってやるぞ

この歌は、『古事記』の中に宮廷歌謡として記録されている。口誦の歌が数百年伝承されて書物に残った形である。元は戦にまつわる歌で、戦の前後の酒宴で歌われたと考えられている。内容は地域に伝えられたであろう素朴なものだが、国の起源にかかわる神聖な伝承として保存された。記録として残る数百年前、3世紀の発生が考えられている。

③歌垣(男女の掛け合い)の歌

内容の三つめは、古代の共同体における年中行事での歌、歌垣である。多くの男女が聖所に集い、飲食し、掛け合いによって近づき、結ばれる行事で歌われた歌のタイプである。こうした行事は中国西南地域から東南アジアの少数民族地域へ広がっていることが文化人類学の調査からも明らかとなっており²⁾、日本文学研究のなかでも注目されてきた分野である³⁾。以下のような

2) 内田るり子「照葉樹林文化圏の歌垣と歌掛け」(『文学』岩波書店、1984年12月号)

3) 辰巳正明に一連の研究がある。「『詩の起原 東アジア文化圏の恋愛詩』(笠間書

例で見ることができる。

『古事記』下巻 仁徳天皇

(原文) 波斯多弓能 久良波斯夜麻袁 佐賀志美登 伊波迦伎加呢豆 和賀弓登良須母

(訓読) 櫛(はし)立(たて)の 倉(くら)櫛山(はしやま)を 嶮(さか)しみと 岩かきかねて わか手とらすも

(口語訳) ハシタテノ 倉櫛山が険しいので、岩をつかまないうで 私の手を取りなさい

(原文) 波斯多弓能 久良波斯夜麻波 佐賀斯祢孺 伊毛登能頰禮波 佐賀斯玖母阿良受

(訓読) 櫛(はし)立(たて)の 倉(くら)櫛山(はしやま)は 嶮(さか)しけど 妹(いも)と登れば 嶮しくもあらず

(口語訳) ハシタテノ 倉櫛山が険しいけれど、あなたと登れば険しくもないよ。

歌垣での掛け合いの歌は、相手をからかう、かわす、やりこめるなどの形式を持っていたが、男女のやりとりは、徐々にその内容を、人々の内面を映す恋の歌へと変容していく。日本最古の歌集、万葉集（後述）にはその歌垣的なものから抒情的なもの（それは最初の勅撰和歌集、『古今集』（905年）へと接続する）への推移を見て取ることができる。しばしば、日本文学史で歌謡の叙事から抒情という図式が言われるが、小川学夫が「祭式にはくまられた叙事歌謡と、歌掛けという場での抒情歌謡とは、はるかに昔から併存し、互いに影響を与えたり受けたりしながら消長の歴史を繰り返してきた」⁴⁾ というように、これらのタイプの歌は互いに影響しながら歌われてきたと考

院、2000年）など。また、工藤隆 岡部隆志『中国少数民族歌垣調査全記録1998』（大修館、2000年）など。

4) 『奄美民謡誌』（法政大学出版局、1979年）

38 국제언어문학 제41호(2018.12)

えられる。

3 日本古代の歌謡の形式と漢詩の影響

日本古代の歌謡に、まだ定型は少ない。1フレーズ3音のものや4音のものなど、現在の定型から見ると短いものも多い。それが、時間をかけて次第に整えられていき、後に発達する歌体の原型が見られるようになっている。完全な定型というのではなくとも、以下のいずれかの形に近いものが多い。

577 片歌

577 577 旋頭歌

57577 短歌

「5・7」×n+7・7 長歌

こうした5音と7音の組み合わせ、またこの後日本の詩歌の典型となった短歌の歌体57577に強い影響を及ぼしたのが中国の漢詩である。以下、光田和伸の整理⁵⁾（*5）に従って日本語の定型詩への漢詩の影響のプロセスを見ておこう。

日本の詩の定型の立ち上がりに強く影響したのは五言詩である。後代のものとなるが、杜甫の「春望」で見ると

国破・山河在

城春・草木新

のように、「2・3 / 2・3」の音節の単位、その反復で構成されている。中国語は基本的に閉音節で、その漢字の1字に日本語（短母音・開音節）ではほとんどの場合2音節に置換される。漢詩の「2・3 / 2・3」の音節の単位が「4・6 / 4・6」となる。ここに、いわゆる日本語の「てに

5) 「定型の成立—万葉集論の礎として」（『文学』岩波書店1999年10月号）

をは」などの1音節の助詞、あるいは助動詞がついて一つの音節となる。
「5・7/5・7」への変化である。

漢詩の最小単位は「聯」で、日本語の詩の最小単位も「5・7/5・7」となる。その半分が「片歌」、「5・7」に、後の言葉を繰り返すRefrainで7→「5・7・7」となる。それを二人で歌うなど「5・7・7」+「5・7・7」となり、Refrainの重複を取り除くと「5・7・5・7・7」となり、短歌の形式となる。ここから、日本語の定型詩は中国の詩型とは異なる方向へと歩み出した、と考えられている。

4 歌集の成立

751年『懐風藻』（日本人による最古の漢詩集）が成立した。64人の作者、120編の漢詩が収められ、万葉歌人を兼ねる作者も多い。形式としては五言詩が大部分をしめ、中国六朝詩の強い影響のもとにある。日本最古の歌集『万葉集』の立ち上がりの頃には、漢詩作者と歌人が兼ねられ、その手法や表現の世界を共有していたのである。

成立年代は明確には知れないものの、8世紀後半に日本最古の歌集『万葉集』全20巻 4500首が成立した。その内訳を見ると、

5・7・5・7・7の 短歌 4200首
「5・7」×n+7・7 長歌 260首
5・7・7・5・7・7 旋頭歌 60首
5・7・5・7・7・7 仏足石歌 1首

で、短歌が大部分を占めるようになっており、万葉集は、口誦の歌から57577の短歌体を中心する「和歌」への推移を示すことになっている。

部立（内容別）は雑歌（儀式など宮廷を中心とした歌）、相聞歌（人同士のやりとりした歌）、挽歌（死を悼む歌）であり、この部立のありようは万葉集だけのもので、古今和歌集以降のものとは異なる。『文選』他、中国古

40 국제언어문학 제41호(2018.12)

典によるものである。

5 『万葉集』の中の東アジア

前節で述べた漢詩集『懐風藻』の詩人が万葉歌人を兼ねていたことから知られるように、日本語の定型詩である和歌中にはおのずと東アジアの表現が流れ込んでいる。山上億良や大伴旅人など、代表的な万葉歌人が積極的に漢詩と向き合い、和歌の表現を模索したことが知られている。本稿では、一つだけ、その密接な例を挙げておきたい。大伴家持（万葉集の代表的歌人、編集にも深く関わる）の例

（原文） 宇良々々尔 照流春日尔 比婆理安我里 情悲毛 比登里志於母倍婆 (4292番)

左注 春日遅々 鶴鶴正啼 悽惻之意非歌難撥耳 仍作此歌式展締緒

（訓読） うらうらに照れる春日にひばり上がり心悲しも独し思へば

（口語訳） うららかに照っている春の日の光の中に、ひばりの声が空高く舞い上がる。この心は、悲しみに深く沈むばかり、ただ一人物思いにふけていると

左注 春の日は暮れがたく、鶯はひたすらに鳴く。痛み悲しむ心は、歌でなければ払いのけることはできない

この左注は、『詩経』「春日遲遲、卉木萋萋。倉庚喈喈、采芣祁祁」（小雅出車）などによる。

この注はよく家持の文芸観を表していると言われ、漢詩は内容としても、和歌の表現の中に脈々と流れ込んでいる。

終わりに

日本古代の詩歌は、東アジアの他の国々に対する対外的な姿勢の中で伝承されるべきものとして意識され、表現を鍛えられ、文字を得るプロセスを経て書記され今に伝えられる。いかに日本の詩歌が立ち上がったか、現状では素朴な信仰にまつわる祭式との関わりで説かれることが多い。本稿では、多層的なありようを考えるべきこの問いへの答えの一つとして、東アジアとの関係性こそが、日本の詩歌の伝承と洗練の原動力であったと結論づけたい。

一方、圧倒的で先進的な大陸の文字文化を前にしたとき、日本語の「文字以前」のものが思い起こされ、遡る形で求められもしたと考えられている。「言霊」(言語精霊)という観念がそれを表している⁶⁾。今でも(かなり薄められてはいるが)この考えは残っている。言霊は、かつて神など超越的なものに関する言葉に連なるものに宿ると考えられていた。日常語ではない、特別な力を持つ言葉—この言語の神話は、今も57577の音数を持つ短歌(これは上に見たように東アジアからやってきた詩歌によって整えられた訳だが)が読み継がれていることの一つの鍵であると言える。日本語を使う人々の心を乗せる器として、時代ごとにその様相を変えつつ、短歌はこれまで読み継がれてきたし、これからも読み継がれていくはずである。

6) 西郷信綱「言霊論—和歌の永続性に関する覚え書」(『西郷信綱著作集6』(平凡社、2011年))

42 국제언어문학 제41호(2018.12)

일본(日本) 시가(詩歌)문학의 시원(始源)과 영향(影響)

사이토 아키코 * (일본 오비린대학)**

들머리

일본의 시가

57577의 정형(단가)이 확립되어, 현재에도 자유시와 함께 널리 창작되고 있다(현대단가). (575俳句는 17C 이후 ~)

(발표자도 현대가인으로서 단가결사「鼓笛」소속이며, 매월 단가를 발표하고 있다)

『한서(漢書)』(전한서(前漢書)) 지리지

『樂浪海中有倭人 分爲百餘國 以歲時來獻見云』¹⁾

(낙랑군의 바다 중에 왜인이 있다. 100여 곳으로 나누어져 있다. 계절마다 와서 공물을 헌상한다. -한국어역 역자, 이하 같음)

* 일본열도에 작은 나라가 생겨났다. 그 작은 나라들이 기원 전후에는 대륙과의 접촉을 하게 되었다.

* 사이토 아키코(齊藤昭子). 호적 이름은 「柿並昭子 (KAKINAMI AKIKO)」.
** 桜美林大学 (おうびりんだいがく、英語: J. F. Oberlin University). 이 논문은 韓國Haiku研究院 郭大基 원장이 번역하였다. 한국어 번역은 일본어 원음에 충실하게 함을 원칙으로 삼으나, 한국인에게 친근한 한자 등의 경우에는 한국식 한자 읽기를 택하였다. 표기는 국립국어원 외래어 표기법에 의한다.

1) 樂浪郡の海の沖に倭人がある。国は100余りに分かれている。季節ごとに来て、貢物を献上する。

『위지(魏志)』 왜인전 (『삼국지』 「위서」 제30권 오환선비동이전왜인조)
 「其死有棺無槨 封土作冢 始死停喪十餘日 當時不食肉 喪主哭泣 他人就
 歌舞飲酒 已葬 學家詣水中澡浴 以如練沐」²⁾
 (그들은 사람이 죽게 되면 棺은 쓰나 槨은 쓰지 않으며, 흙을 쌓아 올려 무덤
 을 만든다. 10여일 초상을 치를 때는 육식을 하지 않으며, 상주는 소리 내어 곡
 을 한다. 다른 사람들은 음주 가무를 한다. 장례를 마치면 온 집 안 사람들이 물
 에 들어가 목욕으로 몸을 깨끗이 하여 상스럽지 않은 기운을 떨쳐 버린다)

* 3세기의 일본, 사자의례 속의 「우타(歌)」

기록으로 남겨지지 않았지만, 대륙의 문화와 접촉하는 가운데, 훌륭한 가무
 음곡·시가를 접하게 됨에 따라 일본열도에 살고 있던 사람들이 그것을 흡수
 하고자 하였던 것은 어렵지 않게 상상할 수 있다.

일본 고대가요는, 동아시아 다른 나라의 선진적인 문화에 자극을 받아 발
 달된 측면도 있다고 생각할 수 있다. 대외적인 자세 중에 <민족>이나 <역사>
 의식이 생기게 되었고, 그런 의식에 의해 전승되어져 온 것이다.

1. 일본어가 표기를 획득하는 과정

- ① 한반도³⁾(백제) 경유 혹은 직접 왕래로 중국어를 배운다.
- ② 「한문체」로 쓴다.
- ③ 「변칙한문체」로 쓴다-「혼독」을 전제로 일본어 그 자체를 옮기는 스
 타일 (「변체한문」이라고도 한다)
- ④ 만엽⁴⁾가나의 등장 (한자를 표음문자로 사용, 음훈 모두 이용형)

2) その死には、棺有りて槨無し。土で封じ冢を作る。始め、死して喪にとどまること
 十餘日。當時は肉を食さず、喪主は哭泣し、他人は歌舞、飲酒に就く。已に葬るや、
 家を挙げて水中に詣(いた)り澡浴す。以って練沐の如し。
 3) 일본어 원고에는 朝鮮半島로 표기되어 있으나, 한국에서는 통상적으로 한반도(韓半
 島)로 불리기 때문에 한반도로 번역하기로 한다.
 4) 일본어 원고에는 萬葉으로 표기되어 있다. 일본어 발음은 <만요>이나 한국에서는

44 국제언어문학 제41호(2018.12)

- ⑤ 히라가나, 가타카나의 등장
 · 화⁵⁾문체와 한문체의 대립 → 화한혼효문⁶⁾으로 (중세 이후)

『고사기(古事記)』 (일본에서 가장 오래 된 서적. 구송 신화를 국가의 역
 사와 결합하여 편찬한 것임)

『일본서기(日本書紀)』 (신화시대를 시작으로 편찬한 편년체 역사서)
 이 두 책 속에 「기기가요」 7)의 「우타(歌)」가 남아 있다. 『고사기』에
 110수, 『일본서기』에 130수 (두 곳의 중복을 제외하면 190수)

구송되었던 것으로 공동체 속에서 계승되어져 온 「우타(歌)」의 모습
 『고사기』·『일본서기』의 이야기 속 인물에 의해 불렸던 것 등으로 남겨
 지다.
 ↑ 고대가요의 일단을 추측할 수가 있다.

2. 일본 고대가요 내용

1. 자연에 말 걸기

『고사기』 중권 신무천황
 阿米都都 知杼理麻斯登登 那杼佐那流斗米⁸⁾
 あめつつ 千鳥ましとと などさける利目
 (물때새 멧새 눈처럼 문신하여 왜 저렇게들 매서운 눈초리를 하고들 있는지

한문 표기 발음 그대로 이해되기 때문에 <만엽>으로 번역하기로 한다.
 5) 화(和)는 일본의 의미이다.
 6) 순 일본 문어문체와 한문 혼독체가 혼용된 문체
 7) 『고사기』 『일본서기』 각각의 마지막 글자 하나씩 골라 명명(命名). (밑줄은 역
 자)
 8) 訓詁: あめつつ千鳥(ちどり)ましととなどさける利(と)目(め) (현대일본어역: アマ鳥・
 ツツ鳥・チドリ・シト鳥のように、どうして目じりに入墨をして、鋭い目をしてい
 るのですか。)

た(立)ちそは(楓)の み(実)のな(無)けくを こ(扱)きしひゑね
 うはなり(後妻)が な(看)こ(乞)はさば
 いちさかき(枱) み(実)のおお(多)けくを こきだ(許多)ひゑね
 ええ しやこしや こはいのごふそ
 ああ しやこしや こはあざわら(嘲笑)ふそ

(우타16)의 사냥터에 도요새 잡는 덮을 놓았다.
 내가 기다리고 있어.
 도요새는 걸리지 않고 그 대신에 덩치 큰 고래가 걸렸네.
 절치가 반찬 달라고 하면
 호살나무와 같이 먹을 것 살점 없는 부분을 떼어주고
 후처가 반찬 달라고 하면
 이치사카키 나무17)와 같이 먹을 것 살점이 많은 부분을 떼어주네
 예- 샤코샤 이 소리는 적을 미워하는 것이며
 아- 샤코샤 이 소리는 적을 조롱하는 것이다)

* 『고사기』 중에 궁정가요로 기록되어 있으며, 구송의 「우타(歌)」가 수 백년 동안 전승되어 서책으로 남은 형태. 원래는 군가. 국가의 기원과 관련하여 신성한 전승으로 보진되었다. 3세기 대에 발생한 것으로 생각할 수 있다.

○ 우타가키18)(歌垣) (남녀의 창화)

- 16) 지명이며 현재의 나라현(奈良縣) 우다군(宇陀郡).
- 17) (枱:いちさかき)1.상목적목 ツバキ科의常緑低木。山地に生え、庭木とされる。よく分枝し、葉は狭い卵形で鈍い鋸歯があり、質厚く光沢がある。雌雄異株。春、葉腋(ようえき)に白色の小花を少数つける。サカキの代用として枝葉を神前に供える。ヒサギ。 [「枱の花」は [季] 春]
- 2.마루라코토바(枕詞) 작은 자흑색(紫黑色)의 열매를 많이 맺기 때문에 「実多し」와 연계된다.
 ヒサキが小さな紫黑色の実を多くつけるところから「実多し」にかかる。 「一実の多けくを / 古事記 中」
- 18) 남녀가 산이나 마룻가 등에 모여 먹고 춤추며 노래함으로써 성적 해방을 꾀하던

48 국제언어문학 제41호(2018.12)

고대 공동체의 연중행사 때의 「우타(歌)」 많은 남녀가 성스러운 곳에 모여 먹고 마시며 창화(唱和)를 통해 가까워져 결합하던 행사.
 (이 행사는 중국 서남지역에서 동남아시아의 소수민족지역으로 확대되고 있다)

문화인류학 우치다 루리코19)

『고사기』 하권 인덕친황

波斯多呂能 久良波斯夜麻袁 佐賀志美登 伊波迦伎加泥弓 和賀呂登良須母20)

はしたての くらはしやま(倉橋山)を さが(驗)しもと いは(岩)かきかねて わ가て(手)とらすも

(마치 사다리 세운 듯한 험악한 구라하시산 바위를 잡지 말고 내 손을 잡으시오)

波斯多呂能 久良波斯夜麻波 佐賀斯祁紆 伊毛登能傾禮波 佐賀斯政母阿良受21)

はしたての くらはしやまは さがしけど いも(妹)とのぼ(登)れば さが(驗)しくもあらず

(마치 사다리 세운 듯한 험악한 구라하시산 사랑하는 아내와 오르면 안 위험해)

놀이.

훗날에 와서는 귀족들 사이에서 남녀가 무리지어 창화(唱和)하는 풍류놀이.

- 19) 内田 り子 (うちだ りこ, 1920년 - 1992년) 도쿄 출생. 일본의 민속음악연구자. 국립음악대학 교수 역임.
- 20) 梯 (はし) 立ての、倉橋山を、驗 (さか) しもと、岩かきかねて、我が手取らすも (현대일본어역:梯子 (はしご) を立てたような険しい倉橋山の、岩をつかまないと私の手を取りなさい)
- 21) 梯 (はし) 立ての、倉橋山は、驗 (さか) しけど、妹 (いも) と登れば、驗 (さか) りしくもあらず (현대일본어역:梯子를立てたような倉橋山は、険しいけれど、애しい妻と登れば険しくもないよ)

* 「제사의식을 통하여 발전해 온 서사가요와 문답이라는 장을 통한 서정 가요는 아득히 먼 옛날부터 병존하였으며, 상호간에 영향을 주고받고 함으로써 흥망성쇠의 역사를 반복하여 왔다」 (오가와 히사오²²⁾)

3. 일본 고대가요, 형식

아직 정형의 형식을 갖춘 것은 적지만, 점차적으로 정형 형식을 갖추어 가게 되고, 그 후에 발달된 가체의 원형으로 볼 수 있는 다음의 형식에 가까운 것이 많다.

- 577 片歌(가타우타)
- 577 577 旋頭歌(세도카)
- 57577 短歌
- 「5·7」×n+7·7 長歌

◎ 한시(漢詩)의 영향, 정형면

중국의 오언시 예 「두보(杜甫) 춘망(春望)」
 国破·在山河
 城春·草木新 — 「2·3 / 2·3」

한자 1자에 일본어(단모음·개모음) 2음절 → 「4·6 / 4·6」
 + 1 음절의 조사(조동사) → 「5·7 / 5·7」
 → 「5·7」에, Refrain+7 → 「5·7·7」= 최소단위 片歌(가타우타)
 → 2인오로 읊는 등 「5·7·7」+ 「5·7·7」= 중복 → 「5·7·5·7·7」= 短歌

22) 전(前) 鹿児島純心女子短期大学 교수, 奄美沖繩民間文芸研究会 編集委員, 岩波講座「日本文学史第15巻 琉球文学, 沖繩の文学」(岩波書店) 1996年 등.

50 국제언어문학 제41호(2018.12)

○ 『가이후소(懷風藻)²³⁾』 일본에서 가장 오래 된 한시집(漢詩集)의 성립

751년 성립. 64인의 작자. 120편의 한시 만엽가인을 겸하는 작자도 많다.
 5언시가 대부분을 차지한다.
 중국 육조시의 강한 영향.

◎ 『만엽집』 성립으로

일본에서 가장 오래 된 (8C 후반) 가집 전 20권 4500수
 4500수의 내역

- 57577의 「短歌」 4200首
- 「5·7」×n+7·7 長歌 260首
- 5·7·7·5·7·7 旋頭歌 60首
- 仏足石歌²⁴⁾ 1首

* 「만엽집」은, 구송의 「우타(歌)」 → 57577의 단가체를 중심으로 하는 와카(和歌)로 바뀌는 추이를 보인다.

분류(내용별)

잡가(雜歌) 의식 행차 등 궁정 연회를 중심으로 한 「우타(歌)」

23) 751년 성립. 작자는 오토모 오지(大友皇子) 오쓰노 미코(大津皇子) 후지와라노 우마카이(藤原宇合) 아베노 나카마로(阿倍仲呂) 등이다.

24) 57577형식. 五·七·五·七·七·七からなる和歌の形式は、仏足石歌体と呼ばれている。仏足石(仏足跡)の歌

상문가(相聞歌) 사람 상호간 증답(贈答)을 중심으로 한 「우타(歌)」 연애노래
만가(挽歌) 죽음의 애도를 중심으로 한 「우타(歌)」 관(棺) 끄는 노래

○ 『만엽집』 속의 동아시아

야마노우에노 오쿠리²⁵⁾와 오토모노 다비토²⁶⁾ 등 대표적인 만엽가인이 한 시를 작시하였으며, 한편으로 와카의 표현을 확립하였다.

오토모노 다비토 (『만엽집』의 대표 가인, 편집에도 깊게 관여함)의 예

宇良々々尔 照流春日尔 比婆理安我里 情悲毛 比登里志於母倍婆 (4292番)
うらうらに照れる春日にひばり 上がり心悲しも独し思へば
(화창한 봄날 종달새 춤추듯이 날아오르나 마음은 슬프도다 나홀로 생각하면)
左注²⁷⁾
春日遅々鶴鷗正啼 悽憫之意非歌難撥耳 仍作此歌式展縮緒
(春の日は暮れがたく、鶯はひたすらに鳴く。痛み悲しむ心は、歌でなければ払いのけることはできない)
<느릿한 봄날 울어대는 피꼬리 소리를 듣네 이렇게 슬픈 마음 노래로 풀어내고>

이 는 다음과 같은 『시경』 (소아출거) 등에 의한 것이다.

<봄날은 길고 초목은 무성하네 피꼬리 지저귀고 수북히 쑥 캐노라>
「春日遲遲、卉木萋萋、倉庚啾啾、采繁祁祁」²⁸⁾ 『시경』 (소아출거)

25) 山上憶良(660~733) 702년 중국 唐으로 감. 한문학의 소양이 풍부.
26) 大伴旅人(665~731) 727년경 大宰帥로 규슈(九州)에 부임.
27) 좌주(左注). 앞의 노래(우타:歌)가 끝나고 그 노래의 배경이나 참고사항을 주(注)의 형식으로 기록한 것. 왜 좌주(左注)라고 하는 것은, 일본 등 옛 문헌의 경우 일반적으로 오른쪽에서 왼쪽으로, 위에서 아래로 적는 방식이었기 때문이다.
28) 봄날이 길고 긴지라 풀과 나무가 무성하며 피꼬리가 피플피플 울며 쑥을 많이도

52 국제언어문학 제41호(2018.12)

한시의 표현은 내용면에서도 와카의 표현 속에 스며들어 흐르고 있다.

마무리

일본의 고대시가는 동아시아의 다른 나라에 대한 대외적인 자세 속에서 발생하였으며, 그런 의식에 의해 전승되고 발전 단련되어져 왔다. 동아시아와의 관계성이야말로 일본의 시가 전승과 세련의 원동력이었다고 말 할 수 있다. 한편, 압도적으로 선진적인 대륙의 문자문화를 직면하였을 때, 일본어의 「문자이전」의 것을 상기하며 추구한 바도 생각해 볼 수 있다. 「고토다마」(언어정령)의 판넌이 바로 이것이다. 「고토다마」(언어정령)은, 신 등 초월적인 것에 관한 말, 제례의식 및 이와 관련된 것에 깃들여 있다고 생각할 수 있었다. 일상적인 말이 아닌 특별한 힘을 가진 말이다. 이런 언어정령 언어의 신화에 힘입어 일본어를 사용하는 사람들의 마음을 담는 그릇으로서 지금도 와카는 계속적으로 울어지고 있다.

이 논문은 2018년도 국제언어학회 국제학술대회에서 발표되어 무심사 게재 확정됨

뜰거늘 신문할 괴수를 잡고 무리를 붙잡아 잠깐 사이에 돌아오니 혁혁한 남중이여
협운을 평정하도다. [春日遲遲、卉木萋萋、倉庚啾啾、采繁祁祁、執訊獲醜、薄言還歸、
赫赫南仲、玁狁于夷。]의 일부분. 밑줄은 역자(譯者).